

## 1. 教育の責任

地域・在宅領域では地域で暮らす多様な人々に対し、文化や価値観を理解し、心身における健康課題を導き出し、その人らしく生活が営めるように意思決定の尊重と権利を遵守し、安心・安全な看護を実践できる看護専門職を養成する責任がある。そのためには看護教育者として在宅看護や地域で働く専門職との連携、地域の人々の健康づくり、家族ケアなどのマネジメント能力の学修を深める授業展開が重要である。すなわち、看護能力への育成には具体的な事例を組み入れた体験やイメージづくり、実践を意識して学生への教育向上に努める責務があると考えている。

大学院では看護理論を組み合わせるグローバル看護における科学的実践能力を養う責務から諸外国と日本の健康課題の抽出力を高め、エビデンスに基づく在宅看護や地域看護を学生が主体的に行動し、思考能力を高めるための授業を展開している。

授業科目は次の通りである。

学部：健康と社会・生活：2年生秋学期（8回1単位） 社会福祉と社会保障：2年生秋学期（オムニバス15回2単位）

大学院：地域在宅看護学特論（15回2単位） 看護研究演習（30回2単位） 特別研究（30回4単位）

ただし、健康と社会・生活については旧カリキュラムであり、休学者のみである。2023年度は体調不良のため、授業はなかった。

## 2. 教育の理念

1. 国際看護学部の教育理念の一つである国際化する社会で多様な人々を対象に人々の営みや価値観を理解し、受容する広い視野を持ち、地域で療養している対象者とその家族のニーズに応じた健康支援と看護実践する人材としての育成を基盤とした看護教育とその制度の理解に努める。

2. 大学院教育では基礎看護学教育を基盤に広い視野に立って高度かつ、専門的な学術理論及び応用を研究し、社会の進展と文化の向上に寄与する人材の育成に努め、実践力とマネジメント能力の向上を目指す教育展開に努める。

## 3. 教育の方法

地域・在宅領域では、地域における健康課題や制度を中心に療養生活を送る対象者に対する支援の理解が必要である。

その中でも特に地域で療養しながら心身状態のアセスメント能力の育成と支援は介護保険サービスの理解及び内容、活用しながら安心して暮らす意味付け、ニーズへの対応、家族への介護負担問題など多くの課題がある。学生はこれらを自ら考えることができるように、障害者(児)の療養生活の様子、地域包括支援センターや地域コミュニティの ICT を活用した検索とレポートによる理解度の評価、医療ボランティア活動などのビデオ鑑賞などを行っている。加えて、学生がどのように感じ、看護の課題抽出ができるかを知るためのグループワーク討論やプレゼンテーションを組み入れた授業を進めている。

大学院では、看護専門職としての看護実践力と判断力、マネジメント力を高めるための看護実践専門職を目指している。具体的には、地域社会の特性を踏まえて、諸外国の制度のあり方を理解するためあるべき看護を目指すための対策を発表させている。発表後、グループディスカッションを設け、それぞれの研究と照らし合わせて日本の制度や地域・在宅看護について討論を実施している。また、未来の看護について考えさせるため、新しい知見や研究などの紹介を行い、未来への看護のあり方と倫理的思考能力へのスキル向上を図るための教育方法を行っている。

### 教育実践

1. 社会福祉、社会保障の授業については授業の終了後に授業内容から、いくつかの課題を設け、地域で障害を持つ人々の暮らしや制度の学生の理解を深めるため、「大事な人」をテーマに用紙に書いてもらい、その内容を聞きながら障害者(児)の講義、ビデオ鑑賞にて障害者(児)の尊厳と権利擁護、スティグマについて理解させ、看護の役割を考えさせる授業をしている。

2. 学生に地域・在宅看護への興味がわくように1週間前にテキストを中心にL-campusにパワーポイントを作成し、教科書と照らし合わせて予習ができるようにしている。

3. 学修評価として、社会福祉・社会保障ではオムニバス授業のため、分担点数は授業の課題に対する積極的な参加、レポートの成果10点、としている。

## ティーチング・ポートフォリオ

大学名：大手前大学 所属：国際看護学部 名前：山本 純子 作成日：2024年1月9日

レポートは、障害者福祉の理解を深めるため、5つの選択肢を設けている。その選択肢を選んだ動機、制度、内容、課題の順に1600字程度にまとめて提出する方法をとっている。評価は文章力と論理性等の学修の理解を主としている。

4. 大学院の地域・在宅看護学特論は、シラバスに沿って授業展開を行っている。その実践は地域・在宅の理論展開とWHO、ICNなどの国際的な医療に関する情報、諸外国における看護教育、異文化看護などの学修を中心に行っている。その他、興味のある外国の制度、文化、看護、保健衛生、看護教育などを幅広くWebなどを利用して20分のプレゼンテーションを行い、学生が自己で調べた資料を基に学生間で自由に発言する場を設け、多様な意見を研究に繋がるように導いている。

5. 研究演習、特別研究では文献レビューと合わせて、データの読み方、解釈方法を行い、研究に活用できるようにしている。また、研究計画書、倫理審査などの研究に関する一連の流れを習得するために授業とは別に個別の学生の空いている時間を工夫し、課題抽出や疑問、研究に関するスキルに繋がるように一緒に行っている。

6. 大学院はプレゼン能力と課題のまとめと内容の成果度、80点、授業の参加態度、10点、発言力10点などを総合的な判断している。

### 4. 教育の成果

1. レポート提出のまとめを散見すると制度や内容、看護の役割及び、課題を大筋まとめており、個々の障害者に関する考え方や課題を見つめることがほぼできている。また、期日をほとんどの学生が守り、学修意欲に繋がっていた。

2. 社会福祉と社会保障のレポート提出の結果、「障害者の認識が変わった」、「在宅実習に繋がる」など、学生からの評価を得ている。さらに障害者に対する認識が変化したことによって今後の看護の役割が明確になったとの意見もあり、一定の教育成果が得られた。

3. 地域・在宅特論では学生から「わかりやすい」「研究の解釈の点と線が繋がった」などの声や「グループディスカッションによって違う意見や多くの知識を得ることができた」と評価を得た。

4. 特別研究では、研究計画書の期日提出、中間発表会、倫理審査の申請など順調に進み、教育成果を得ている。しかし、主体的に研究が進められるように国際看護研究の意義、目的、社会への貢献度などを中心にした教授内容が十分でなかった。

### 5. 改善への努力と今後の目標

地域・在宅で暮らす障害者の理解の学修効果を高めるには身近に体験がない学生にとってイメージするのが容易ではない。そのため事例やビデオ鑑賞、教員の体験話などによる授業をしているが限界がある。そこで、今後は実際に働いているゲストスピーカー及び、障害者の方の生の声を聴く機会を設け、作業所、療養している施設の見学などを試みる。

大学院では、個々の研究のヒントが得られるような理論学修や地域や国際社会の特性の関連した授業展開が重要になってくることから、今後は他の指導教員と情報共有を行い、質の高い指導方法の構築と異文化による研究スキルを図る方法を考えていく。

### 【添付資料】

テキスト：社会福祉と社会保障 メディカ出版 2023年度版

参考資料：エンド・オブ・ライフ看護学-基礎と実践 小笠原知枝編著 スーパルビロカワ

看護実践にいかすエンド・オブ・ライフ 長江ひろ子 日本看護協会

本人の意思を尊重する意思決定支援 西川満則、長江弘子、横江由理子 南山堂

現場で使える在宅ケアのアウトカム評価 島内節 ミネルヴァ書房